

理事長に就任してから1年余になる。

学外の卒業生ではなく、教学から理事長が選出されたのは、中央大学では半世紀ぶりだそうである。その前は常任理事を3年間務めたが、根っからの教員である。

理事長というものがどうあるべきか、未だに自信はないが、学内事情を理解している者が理事長になるメリットを發揮しなければ自分の存在意義がないと心得ている。また、最終責任を負うのは理事長だと思うと、心のどこかに重いものがある。

最近では、大学の理事長がよくニュースに登場する。理事長みずから絡む不祥事の報道が喧しい。

中央大学では、3年前に学内の各種ルールの見直しを行った際、「役員倫理規範」と「役員懲戒規則」を制定することにした。大学のために何かを推進するにしても、ガバナンスとコンプライアンスの確保は大学運営の基本中の基本である。改めて肝に銘じたい。



あるべきバランス

ところで、半年ほど前のことであるが、朝目覚めると、天井や壁がぐるぐると回転して身体のバランスが取れず、まともには立てない。医師によると、内耳の奥の三半規管の中でわずかな骨片が剥がれ落ち、それが動き回って平衡感覚が誤作動したらしい。バランス感覚というのは大事なものだと、身をもって実感した。

法人の役割と教学の役割のバランス、あるいは、その他大学運営上のバランスという観点は、複層的な構造を持つ私立大学にとって非常に重要なことである。かつては一教員あるいは法務研究科長（法科大学院長）などの教学の立場からしか大学運営をみていなかったが、大学全体の経営の視点からみるようになって、つくづくそう感じる。

学校教育法の改正により、学長権限が強化され、教授会は学長の諮問機関的な位置付けとなった。中央大学では、かつて、新学部設置など何か新しい重要な提

案があつても、一学部でも反対すれば潰れていた。法改正によつて、そのような場合でも学長の裁定により前に進めることができるようになり、学内規定もそれに沿つて改訂された。しかし、会議でこういう変化を踏まえて発言するとお叱りを受けることがある。法律上はそうであっても、従来どおり丁寧な教授会の理解を得るべきである。丁寧にやることは理想であるにせよ、最後には決断が必要になる局面もあろう。

学校法人の中の望ましいバランスのあり方は、各大学の歴史や規模、建学の精神など、大学の特性によつて違うかも知れない。しかし、法人と教学の協力・連携が事業や改革の推進のために不可欠であることは共通である。

さて、中央大学は、今いくつかの中長期事業を推進しており、さまざまな事柄が私の頭の中を占拠している。ときどきはそれらを忘れることも精神のバランス

大村 雅彦 ● 学校法人中央大学理事長

上大事だと思うのだが、大した趣味を持ち合わせていないせいか、うまくリセツトできない。

年来の友人である成均館大学の鄭圭相総長はソウル近郊に畑を持つており、超多忙な中でも一人で畑仕事をすれば、心を無にしてリフレッシュすることができそうである。畑仕事にも魅力を感じるが、怠惰な人間にはなかなか踏み切れない。最近は散歩すらほとんどしていない。たまに家族で映画を見たり、まれに付き合いゴルフをしたりして、お茶を濁している。所属している国際訴訟法学会が毎年世界のどこかの国で大会を開催するのでそれに参加したり、法学部のゼミ（筆者が唯一担当している科目）の学生を年に一度、海外研修に連れ出したりするのも、数少ない息抜きの一つである。

今や、働き方改革がいわゆる世の中である。仕事と趣味のバランスをうまく取る人が羨ましい。